

地域食堂を楽しもう

エリア：栃木県さくら市
パートナー：社会福祉法人 愛美会

21班 コミュニティデザイン学科
建築都市デザイン学科
社会基盤デザイン学科

鈴木怜音 渡辺薫
櫻井颯哉
及川新太 金澤昂大



1 背景

さくら市にある社会福祉法人愛美会が運営するつきみの杜では「つきみ食堂」という地域食堂を開催していた。しかし新型コロナウイルスの影響で食堂は休止。施設でクラスターが発生したこともあり、その不安感から食堂の再開に踏み切れない状態である。そこで、食堂再開に向けた取り組みを行っていくこととした。つきみの杜には「地域交流スペース」が広くとられており、この場所を有効に活用していく。



施設の案内図

2 課題

食堂が**食事を提供するだけ**の場に
↓
コロナ禍で会食が困難になる
↓
食の他にも**食堂の役割**を見出さないと
活動が一切できない
再開の道が見えない
↓
「誰でも気軽に立ち寄れる」
ももとのコンセプトの薄れ

3 目的

①**食堂を再開させる**
・他の食堂ではどのような活動をしている？
・どんなステップを踏んで再開に向かう？

②**つきみ食堂に求められる姿の提案**
・地域食堂の機能とは？
・様々な人に足を運んでもらうには？

4 方法

■半構造化インタビュー調査

- ・パートナーが考える再開への方針把握
- ・宇都宮市内の地域食堂の実態を知る

■イベントの開催

- ・会食に頼らない交流イベントの計画
- ・会食も実施できるように段階を踏んだ開催

5 分析結果

■宇都宮市内の地域食堂での現地調査

①昭和子ども食堂

緊急事態宣言中も休止することなく運営。
サンタさんが一度も来たことがない子供や
夏休みどこにも連れて行ってもらえない子もいる。
地域食堂には食事の提供以外にも役割がある。

②宮っ子元気食堂

コロナ禍ではあったがお弁当配布などを続けていた。
やめると食べられない人が出てくるし、居場所がなくなる。
普段の生活のストレスが理由で来る大人もいる。
やってあげてくれば続かない。地域に密着することが大切。

- 利用者の目的は食事だけではない
- 継続する（居場所を奪わない）
- 地域との連携

調査から考察した地域食堂の役割

誰かと一緒に食事ができる場所	様々な体験を提供してくれる場所
地域食堂	
社会と関わることができる場所	困っていなくても行っていいみんなの居場所

■イベントの実施状況

①2021.7.27「夏のステイホームinつきみ」

参加者：13名（班員含め）とつきみの杜職員

内容：オリジナルベンチの作成・夏休みの宿題を用いた学習支援

（全4回を予定していたが、残り3回は**コロナウイルス感染拡大により中止**）

備考：感染拡大の影響でポスター配布を近くの児童センターのみに限定

イベントの様子は
こちらからご覧ください！



②2021.12.18「つきみの杜でクリスマス」

参加者：約30名（班員含め）とつきみの杜職員

内容：松ぼっくりを用いたクリスマスツリー作りのワークショップ・お菓子の配布

備考：下野新聞による取材が行われた

成果

- ・過去つきみ食堂を利用したことのないユーザーの獲得
- ・民生委員や市議会議員も参加し、施設の枠を越えた協力体制
- ・幅広い年代の参加

課題

- ・思いの外、参加者数が伸びなかった
- ・運営側が参加者に教える場面が多い（両者がより関われるような運営体制）

③2022.1.14「つきみ食堂再開」

近隣の小学校で**コロナ陽性者が出たため中止**

備考：学生とパートナーとの会議に変更（2022.2.5からの「雛めぐり」について）

6 提案

①定期開催

過去のつきみ食堂参加者推移によると参加者は回を追うごとに増える傾向



今回の調査で行ったようなイベントも含め、食堂を**継続**して開催することで利用者数は増加していくと考える。

しかし、他の地域食堂のように対面で実施し続けるのは困難

「入居者家族も立ち入れないのに地域の人は出入りしてよいのか」という声も...

②コロナ禍での対応策

食堂を楽しみに仕事を頑張っているというお母さんたちもいたし、あの人が元気かなと気になる人もいます
コロナと付き合いながら交流もしたい...

手動販売機の設置

販売機と仕切りを置き、駄菓子や弁当を販売する販売機越しに接触を控えつつコミュニケーションできる

つきみの杜キャラクターのまもるちゃん1号（仮）として2月の雛めぐりから実施予定